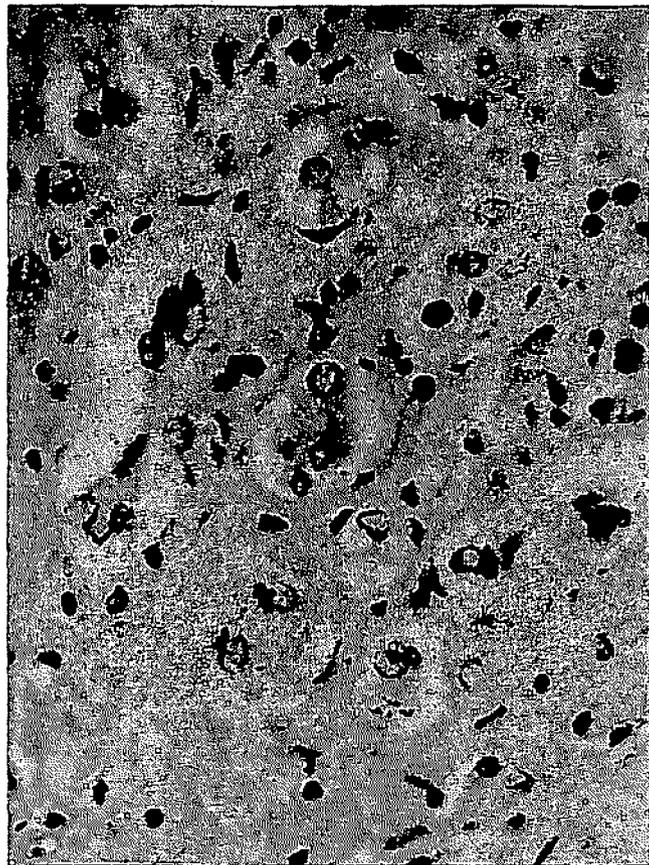
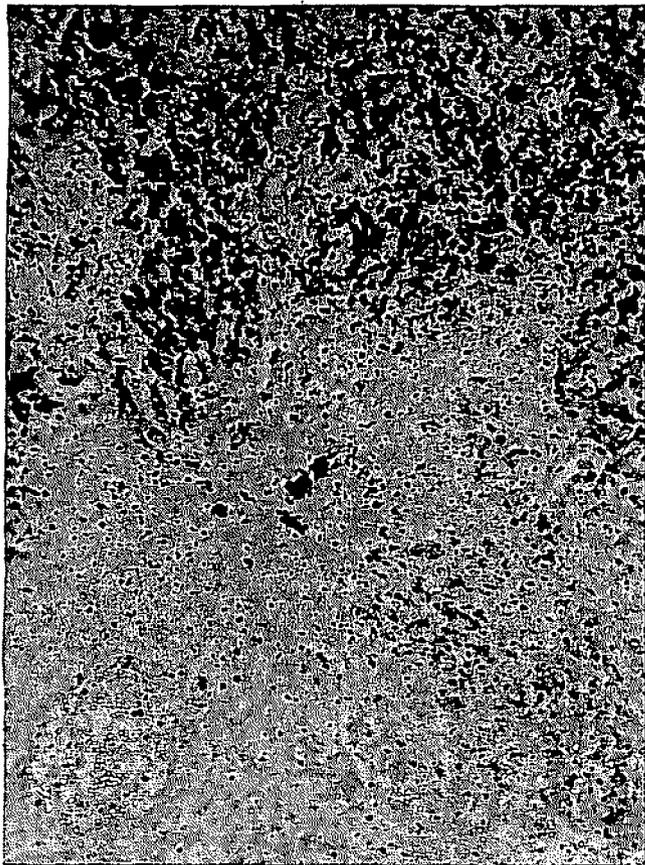


カワウソの肝線維症

東京大学農学部家畜病理学教室出題 第12回獣医病理学研修会標本 No.178



標本のカワウソ（雌）は、昭和42年以来、上野動物園内「こどもどうぶつえん」で飼育されていたもので、昭和45年9月に陸上で過す時間の長くなったことに気付き同時に、腹囲膨大と、動作が緩漫なことも認めたので、動物病院に入院させた。妊娠を疑いX線検査を行なったが胎仔を認めず、同月28日斃死した。

肉眼的所見：

皮下脂肪組織は黄色で、腹腔内には黄色透明な腹水約300mlが貯留していた。肝は著明に腫大し、硬く、全葉暗赤色、肉苜蓿模様が明瞭であった。脾は大型で、暗赤色、断面では脾材・濾胞不明瞭。肺は全体に水腫様で、うっ血がみられた。他の臓器には著変が認められなかった。

肝の顕微鏡所見：

全体に結合織の増生が強く、正常構造はほとんど失われている。ほとんど結合織のみからなる部分と、線維形成が僅かにみられ、肝細胞の変性・脱落・再生が認め

られる部分が混在して、複雑な組織像を形作っている。後者では血液のうっ滞がみられる。結合織は、グリソン鞘周辺から、Disse腔を埋めるように増生し、隔壁の形成は明瞭ではなく、偽小葉の形成も明らかではない。各所で、リンパ球・好酸球を主体とする細胞の浸潤がある。

肝細胞は正常の配列をほとんど失ない、菲薄化、脱落および再生像がみられ、増生した結合織線維は、接する肝細胞索間に侵入し、これを取り囲んでいる。二層の肝細胞の間が拡張して管腔状になっているが、その周囲が一層の類洞内皮に被われている点で、偽胆管と異なっている。結合織内に孤立残存している肝細胞はきわめて少なく、結合織に囲まれた肝小葉の結節性増生もみられない。肝細胞の再生像はそれほど顕著ではない。

組織学的診断：肝線維症

写真左 肝細胞索間の増生した線維

写真右 左写真の一部強拡大